
テイルズオブエクシリア～死神伝記～

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜死神伝記〜

【Nコード】

N6913X

【作者名】

白夜

【あらすじ】

一人の少女が神の手で両儀式の姿で「テイルズ オブ エクシリア」に精霊として誕生した。

彼女は神から自由に生きると言われ、気ままに生きる事を選ぶ。

第0話 Prologue (前書き)

新しく投稿開始！

よければ読んでくださいね！

第0話 Prologue

白い

それが、私が最初に思った事。

それをきっかけに、次々と色々な感覚が目覚める。

「…冷たい」

体を起こすと、視界一面が真っ白な雪で覆われていた。

立ち上がって周りを見渡すが、暗闇と雪原以外に何も見えない。

私は何故、此処にいる？

いや、そもそも

「私は、誰？」

自分は誰なのか、一切わからない。

とにかく立ち上がり、自分の体を確認してみる。

白い紬に青い帯。靴はブーツ。周りに荷物は無し。

ちらりと視界に映る髪は白に近い灰色。顔は見えないけど、体つきからして自分は女である。

「…ん？」

何かないかと探しているうちに、背中側の帯の中に何か挟んでいたのを取り出す。

それは、鞘に納められた一振りのナイフだった。

『こんばんわ』

「…っ!？」

突然、背後から声をかけられた私は、咄嗟にナイフを抜いて振り返る。

そこにいたのは、自分と同じ白色の着物をきた黒髪長髪の女性だった。

『無事に目が覚めたみたいね』

「…お前は？」

私の問いに、女性は真剣な顔を見ると、名乗った。

『私は一般的に神と言われている存在。名前はありません』

「…神だつて？」

私は半信半疑で、女性を睨んだまま警戒を解かずに構える。しかし、次の言葉に思わず絶句した。

『貴女は私が生み出した精霊です』

「なっ!？」

私は、思わず構えを解いてしまった事にも気づかずに目の前の神と名乗った女性に詰め寄る。

「どついう事だ!？私は人間」

『いいえ、貴女は人間ではありません』

神の言葉に、私は再び言葉を失う。

「でも、私には人間としての知識がある。これをどう説明するつもりだ？」

そうだ、私には人間としての知識がある。今、私が話している言葉も日本語だ。なら私は日本人で

『それは、私が日本人の魂を元に貴女を作ったからです。最低限の

知識はありますが、それだけです。個人に纏わる記憶は消してあります。実際、貴女は自分が何者なのかわからないでしょう？」

思わず息を呑んだ。

「私は…本当に人間ではない？」

『そうです。貴女は私が実験で作り出した精霊です。それに、この世界は貴女の元になった魂がいた世界とは違う世界です』

私は掴んでいた彼女の服を離すと、呆然と立ち尽くしていた。

『理解していただけましたか？』

「……一応」

本当は理解してはいないのだが、無理矢理にも理解しなければ狂ってしまいそうだった。

『では、話を進めます』

彼女の言葉に頷いて肯定を示す。

『貴女は、私が新たな生命の創造を行うにあたっての実験で生まれた精霊です。』

貴女は、私が生み出した初の人間以外の生命となります。

初めての試みでしたので、貴女が元々いた世界の亡くなった人間の魂を元に作りだしました。結果は　まあ、貴女自身が証明です。貴女にとっては、世界を越えた輪廻転生と言ったところでしょうか…』

私は、どうやら異世界に神の手で新しい生命として誕生したよう
だ……しかも人外に。

「質問だ。 さつき私は精霊だと言ったな。 なら、この世界には精
霊がいるのか？」

『はい、います。 この世界の名は“リーゼ・マクシア” 人間と精
霊が共存している世界です』

その後、私は詳しくリーゼ・マクシアの仕組みを教えてもらった。

人間の脳にある「^{ゲート}霊力野」と呼ばれる器官から「マナ」と呼ばれ
る世界の根源エネルギーを精霊に与え、精霊は見返りに術を発動さ
せる。これが「精霊術」であり、この世界では一般的な技術である
という事。

精霊は特別な方法で実体化しなければ、普段は目に見えない存在
である事。

そして、そんな精霊達を束ねるのが、主である元素の精霊マクス
ウェルである事。

さらに、この世界の外には「^{シエル}断界殻」を隔てて、エレンピオスと
いう世界がある事。

エレンピオスの存在をリーゼ・マクシアの人々は知らないという
事。

その他には細かい知識等…。

「…ふーん、大体は理解した。それで？ 私は何をすればいい？」

話を聞き終えた後、私は彼女に問いかける。私を生み出したからには、何かしらの命令等があるに違いない。

『自由に生きなさい』

「……は？」

しかし、彼女の口から出た言葉は“自由”だった。

『実験とはいえ、私が勝手に貴女の魂を使った。それに対するせめでものお詫びよ。この世界で、自由に生きなさい』

そう言って、彼女はゆっくりと、空へと昇っていく。

「あ、おい！　せめて私の前世の名前とか教えろ！　もしくは新しい名前をつける！」

本当は文句を言いたいはずなのに、私の口は自然とそんな事を口走っていた。

『…貴女の名前は前世のもの。生まれ変わった貴女には新しい名前が必要よ』

彼女はそう言うと、私に首飾りの様な物を投げ渡した。

『それを着けていなさい。さっき話したりリアルオーブよ』

投げ渡された首飾りには小さな水晶がついていて、中には小さな花の蕾があった。

『それから、貴女の名前だけれど……その身体のもデルになった子の名前を貰うとしましょう。貴女の名前は シキよ』

「…シキ」

それが私の名前……。

『それじゃ、さよならよ。元気でね』

「あ」

私がぼんやりとしている間に、彼女は行ってしまった。

「……………」

私は見上げていた空から、自分の両手へと視線を戻す。

「…シキ、か」

名前のモデルは前世の記憶にある。

『空の境界』の主人公、「両儀式」である。
彼女をモデルに作るなんて、いい趣味をしていると思う。
それなら、私は式の名を借りよう。

私はシキ。

死を司る精霊だ。

とりあえず、肉体は一応、人間のものを使って実体化しているよ
うだし、あの魔眼が使えるか、私を困む山賊らしき人間達で実験し
てみるとしよう。

「オレは死の精霊。……いくぞ　　生きているのなら、神様だって
殺してみせる」

人物紹介（前書き）

おおまかなキャラ設定。

人物紹介

『名前』
・シキ

> i 3 3 0 5 1 | 2 1 3 0 <

『年齢』
・?

『性別』
・女

『身長』
・155cm

『種族』
・精霊

『属性』
・闇

『耐性』
・闇、風

『弱点』
・光

『装備』

「武器」

・ミスリルナイフ

「頭防具」

・なし

「体防具」

・白の紬

「装飾品」

・ファインブーツ

『技』

「双ね鐘楼」

・敵に接近しつつ、高速でナイフを振る技。最後に敵を小さく打ち上げる。

「無名の月」

・小さくジャンプしながら鋭い一撃で前方の敵を切り付ける技。敵をダウンさせる事ができる。

「虎落笛」

・敵を斬りつつ、背後に回る技。技の出が早い。

「陰陽螺旋」

・姿勢を低く構え、敵の攻撃を受け流しつつ反撃するカウンター技。打撃と精霊術で受け流し方が違う。

「玻璃の月」

・小さくジャンプしつつ、満月を描く様に回転斬りを放つ。ジャンプ中でも発動可能。

「隠しナイフ」

・ナイフを投げる遠距離攻撃。牽制や、敵の詠唱を妨害するのに役立つ。

「魔神剣・瞬牙」

・ナイフを振り抜くと同時に剣圧を飛ばす技。スピードがかなり速い。

「月閃光」

・三日月を描く様に敵を連続で斬りつつ、上空に打ち上げる技。連続ヒットするので、ガードブレイクを狙える。

「碎月」

・力を籠めた回し蹴りで敵を吹き飛ばす技。射程が短いですが、ガードを崩す効果がある。

『奥義』

「直死の魔眼・七景終落」

・擦れ違い様に敵の死の線を斬り、ダウンさせる技。ガードをしていてもダメージを軽減できない。

『秘奥義』

「空の境界・斬」

・精霊の力を集めた刀を作り出し、一太刀の下に切り捨てる技。ヒット数は少ないが絶大な威力がある。

『特殊スキル』

「転猫」

・敵の攻撃をタイミングよくバックステップで回避すると、カウンターで斬りつける特殊技。

「残月」

・「共鳴」^{リンク}している時に敵がダウンしたら、ナイフを突き刺して追撃する。一定の確率で敵を一撃で倒す事がある。

「直死の魔眼」

・アピールを行うと、一定時間攻撃力が1.5倍になり、一定の確率で敵を一撃で倒せる様になる。

『キャラ紹介』

神によってリーゼ・マクシアに死を司る精霊として転生した少女。生前の記憶はあるが、身の周りの環境や世界的な知識のみで自身の名前や姿等の記憶は失われている。
ちなみに、生前の死因は事故死である。

神が新しい生命の創造を行うにあたって作り出された実験体で、初めての成功例。

見た目は『空の境界』の主人公、「両儀式」の姿をモデルにしているが、モデルとなっている式より若干背が低く、髪の色も白に近い灰色となっている。

神から自由に生きると言われ、モン高原の真っ只中に放り出され

る。よつて、神様には感謝しているが、次に会ったら一回殺そうと
考えていたりする。

性格は両儀式の言動やイメージを無意識に使っているので、口が
悪く、ぶっきらぼう。しかし、どこかで他人との触れ合いを求めて
いる。ツンデレ。

一人称も「オレ」になり、「私」と使うのは心の中か、素の自分
が出た場合のみ。

身体は人間と変わらないが、あくまでも実体化の為であり、精霊
である事に変わりはない。熱い、冷たい、といった感覚はあるが、
寒さや暑さを殆ど感じず、食事や睡眠も必要ない。

怪我也普通の人間に比べれば早く治る。

『彼女の直死の魔眼』

彼女は肉体こそ両儀式をモデルにした精霊だが、魂はいたって普通
の人間である。

先天的な体質と「」に触れた事により覚醒した両儀式や、七夜
の一族の『浄眼』が臨死体験で「根源」と繋がり、脳が死を理解し
た事により直死の魔眼へと進化した遠野志貴とは違う。

シキは死んだ後、神により魂を拾われ、長い間実験の為に神と共
にあつた。

その過程で、肉体から解き放たれた魂が、自らの死を理解してい
た事、そして「神」という高次元の存在と長い時間を共にした事に
より、物事の成り立ち、生命の理を無意識に理解した。

それらが物事の始まりと終わり　つまりは生と死を理解する事
に繋がり、彼女は知らぬ間に直死の魔眼を開眼したのである。

シキの魔眼は、自らが生命創造の実験体だからか、物事や生命の
成り立ちを脳が理解している為、主に生物殺しに特化している。

しかし、神が与えた「両儀式」と同等の器や、精霊としての感覚の強化により視覚化にも特化しており、概念、空間、時間さえも殺す事ができる。所謂ハイスペック。

第1話 雪原に咲く紅の花（前書き）

質問等ございましたら感想にて受付ます！

第1話 雪原に咲く紅の花

アルヴィンSide

それは偶然だった。

表では傭兵として、裏ではアルクノアの一員として働いている俺は、シャン・ドウの商人からの依頼でモン高原に素材を探しに来ていた。

モン高原はシャン・ドウとカン・バルクの間位置する高原で、年中雪が降っている極寒の雪原だ。

この高原に住む魔物は、大抵が厚い毛皮や鱗で覆われているので、防寒着の素材としてよく使われる。

俺は目当ての素材を入手し、シャン・ドウへと帰るところだったのだが…。

「…ん？」

突然、視界に映っていた魔物達が慌てる様に走り出し、一斉になくなった。

魔物は人間と違って気配に敏感だ。大気中に存在する精霊達の動

きから周囲の状況を瞬時に理解し、外敵から身を守っている。

人間も「^{ゲイト}霊力野」からマナを精霊に与え、精霊術を使ったりするが、魔物の様に本能的に精霊を感じたりはできない。

と、言っても、俺には「^{ゲイト}霊力野」がないので、どのみち解らないんだが…。

とにかく、魔物が逃げ出したという事は、近くに大きな力を持つ何かが見れたということだ。

俺は近くの岩の裏に隠れて辺りの様子を伺う。

傭兵として生きてきた経験から、このような場合には隠れて一旦様子を見るのが一番いい。

もし巨大な魔物でもいた場合は通り過ぎるのを待つか、動かないなら、移動するまでカン・バルクで待たなくてはならない。

なんにしろ、とにかく原因を見つけない事には始まらない。

そんな時だった。

空が、一瞬で闇に包まれた。

「……な、何だ!？」

初めての光景に思わず空を見上げる。

夜が長い夜域のイル・ファン周辺ならともかく、このモン高原が
昼間なのに暗くなる筈がない。

霊勢の異常か、それとも他に原因があるのか、判断に迷った俺は、
とにかくモン高原を離れようと急いで立ち上がる。

幸い、シャン・ドウ側に近い為、全力で雪原を走り、シャン・ド
ウに続く洞窟通路を目指す。

そして、その途中、俺は見た。

雪原のど真ん中に、一人の人間が立っていた。

小柄な身体を包むのは見たことがない雪の様に白い服。

髪は白に近い灰色で、こちらに背を向けているので顔はわからな
い。

身長も低めで、子供のようだが、どこか不思議な感じを覚える。

何より、この雪原にあんな薄着でいるにも関わらず、寒さを感じ
ていないのか一切震えていない。

そして、その人物は何かについた様にこちらに振り返る。

ゾッとした。

こちらに振り返った顔は中性的で、男にも女にも見える。体つき

からしておそらく女なのだろう。

しかし、俺が恐怖したのは、その無表情な顔でもなければ、手に持つ“血まみれ”のナイフでもない。

彼女の“蒼く輝く眼”だ。

その眼には一切の感情は無く、こちらを観察しているかの様にと見えてくる。

「へえ、あんだ、面白いな」

彼女の呟きにハツとして武器を構える。

右手に大剣を、左手には銃を持ち、いつでも動ける様に足を開いて姿勢を低くする。

「ん？　なんだ、やるのか？オレはやりたくないんだけど」

彼女は呆れた様にそう言つと、ナリフを振って付いていた血を落として鞘に納める。

そこでやっと、俺は彼女の足元にある物に気づいた。

紅だ。

ただ、ひたすらに紅かった。

散らばる手足、切断された武器や防具。

人間だったモノが無造作に転がり、彼女を中心に白い雪を紅く染めていた。

「それは お前がやったのか？」

俺の問い掛けに、彼女は興味が無いと言わんばかりに足元の死体を見下ろす。

「ああ、こいつら？山賊みたいだな。オレを襲ってきたから反撃した…。正当防衛だろ？」

それよりも、と言ってこちらを見る彼女の眼は先程とは違い、白い服に反するかのような黒になっていて、もう恐怖を感じる事もなかった。

ゆっくりと、足元の死体を意に解さず、少女は歩み寄ると俺を見上げてきた。

こうしてみると、本当に小柄だというのが顕著にわかる。

しかし、そんな俺の思いは次の言葉であっさりと吹き飛んだ。

「お前、こちらの……リゼ・マクシアの人間じゃないな？」

シキSide

実感がない、というのはこういう事なんだ、と私は思う。

私を囲む山賊であろう男達は、私が忠告しようと口を開く前に武器を持って襲い掛かってきた。

私を囲む様に迫る彼等を見据えながら、私はゆっくりとナイフを抜くと、一番近い男を視る。

左足と右肩から脇腹にかけて、そして武器を持つ右腕に赤黒い“死”という切断面が見えた。

ナイフを持つ腕が自然に動き、下から振り上げる形で右腕を切断

する。

バランスを崩した男に一步近付き、右肩から左の脇腹にかけての線も切断する。

それだけで、その男の身体は生命活動を停止し、真っ赤な血を撒き散らしてずり落ちて有無を言わぬ肉塊と化した。

そのまま振り返りつつ、背後から迫る二人目が振り下ろしてきた武器を根元から切断する。

驚愕に目を見開く男の胸元にある線を同じ様に切断して、男が倒れる前にその死体を蹴り飛ばす。

残りの人数は四人程度、私は人を殺したという実感すら湧かないまま、数秒で残りの山賊を全て殺していた。

実感が無い。

その場に佇み、ただ前を見ながら思考する。

記憶にある知識からして、おそらく私は普通の人間だった。

その私がこうして殺人という、非日常的な行いをしたというのに、全く心が動かないというのはどういう事なのか…。

考えても仕方ない、と苦笑いをしながら、これからどうするかを考える。

そんな時、背後から気配を感じて振り返った。

そこにいたのは一人の男。

身長は180cm前後で、右手に大剣を、左手には銃を持っていた。なかなか良い顔立ちで、茶色のコートと首に巻いた高そうな黒いスカーフが男の雰囲気合っている。

警戒しているのか、こちらの動きを見逃さない様にしつつ、いつでも動ける様にしている。戦闘慣れしている、とも言えはいいのだろうか…。とにかく、先程の山賊達の仲間じゃないみたいだ。

しかし、そんな事はどうでもいい。

私が興味をそそられたのは、彼を視た時に感じた違和感。

先程の山賊達には有ったのに、この男には何かが無い。

生命の成り立ちと、視覚化に特化した私の魔眼は男の脳の一部が先程の男達と違うのだと瞬時に理解する。

そうだ、この男には「^{ゲート}霊力野」が無い。つまりはリーゼ・マクシアの人間ではなく、エレンピオスの人間という事になる。ちよつとした興味から、私は男に声をかける事にした。

「へえ、あんた、面白いな」

それが後に、私の生活を決める事になるなんて思わなかったけど。

た。

既に空に闇は無く、曇った空からは絶えず雪が降り続いてい

第2話 傭兵と精霊（前書き）

原作に関わるのは次からです。

第2話 傭兵と精霊

アルヴィンSide

「ありがとよ、助かったぜ」

笑顔の依頼人から報酬を貰い、俺はその場を離れる。

依頼を達成した後、長くその場に留まると色々と目をつけられる事があるからだ。

シャン・ドウの街中を適当に歩き回りつつ、消費したアイテム類を補充する。

アップルグミやオレンジグミは使い勝手がいい割には値段も安い。傭兵には欠かせないアイテムだ。

一応、ライフボトルも常備しているが、使う場面は無いだろう。

彼女が戦闘で負けるところなんて想像できない。寧ろ、俺が使われる側になる可能性の方が高いだろう。

そんな事を考え、溜息をつきながら宿屋に入ると、現在宿泊している部屋に向かう。

階段を昇った先にある三つの部屋の左側の部屋が“俺達”の使っている部屋だ。

ドアを開けて中に入ると、ベッドの一つに腰掛けた彼女がこちらに視線を向ける。

「ああ、アルヴィンか……おかえり、依頼はもう終わったのか？」

相変わらずの白い服（キモノと言つらしい）に身を包んだ少女シキはこちらを向いたまま、足をぶらぶらとさせながらそう言った。

「おう、案外簡単な依頼だったからな。お前も来ればよかったのに」

「簡単な依頼について行っても暇なだけじゃないか。オレは無駄な事はしないタチなんだ」

じゃあ、宿屋でごろごろしてるのは無駄な事じゃないのか、と危うく言いかけた俺はその言葉を寸前で飲み込んだ。

「そうかい。…じゃあ、今後の話でもするか。一応、明日にでもこの街を離れるつもりだからな」

ああ、と言いつつ、背伸びをしながらシキは椅子を引いて俺と向

かい合う形に座ると、右手をテーブルの上に立てて顎を乗せる。

こんな風に、俺とこいつが話をする様になるなんて、最初は夢にも思わなかったものだ。

あの日　　血で真っ赤に染まった雪原の一角で、俺とシキは出会った。

ハッキリ言えば、シキは不思議な奴だった。

ナイフ一本で防具ごと山賊達をバラバラにした拳げ句、俺がエレンピオス人であることを一目で見抜いた。

本人は、視れば解る、なんて言っていたが、リーゼ・マクシア人とエレンピオス人は「^{ゲート}靈力野」が有るか無いかの違いしか見分ける方法がない。どちらにしる同じ人間だからだ。

しかし、シキは見ただけで細かな違いを見抜いてしまう。本人に聞いてみたが、「オレはそういうのを見分けるのが得意なんだ」と言われたつきり曖昧な返事しかない。

俺は、おそらくだが彼女の目に秘密があると思っている。
雪原で一度だけ見た、あの蒼い瞳。あれに生物の細かい部分を見分ける力でもあるのだろうか。

結局、あの後、シキはこちらの質問をのらりくらりと曖昧な答えで濁し、いつの間にか俺の泊まっている部屋に強引に押し入ってきた。

シキには羞恥心とかがないのか、と最初は思っていた。仮にも間

違いが起きないとも限らないからだ。

注意する意味で、一緒の部屋で寝ても大丈夫なのか、と聞くと、本人は至って真面目な顔でこう返してきた。

「なんだ、オレの体に興味があるのか？物好きなやつだ。

でもまあ、もしもの時は反撃するさ。オレは武器を持たなくてもお前を殺すなんて簡単だぜ？」

そんな風に言われると、シキに関する事には殆ど諦めがついてしまった。

しかし、慣れとは恐ろしいもので 俺とシキが出会ってから既に一週間が経過しているが、今はお互いに普通に会話する程の仲になっている。

今まで独りで世界中を渡り歩いてきたが、こうして同じ部屋に誰かと二人で長い期間一緒にいた事はない。

シキはぶっきらぼうで掴み所がない様な奴だが、こちらの質問には答えるし、シキの方から話題を振ってくる事もある。

はつきり言えば、シキとの生活は楽しいと言える。

一人じゃ厳しい依頼にはついて来て手伝ってくれるし、討伐の依頼では今だにかすり傷すら負った事がない程の強者だ。

見た目は小柄な少女だが、皮膚が固く、体の大きい魔物でさえもあっさりと倒せる程の力を持っているのだ。

武器であるナイフに秘密があるのか、シキ自身に何か秘密があるのか 今だにわからない事は多い。

シキが俺を気に入る理由は解らないが、彼女が何者かわからない以上、必要以上に気を許す事はできない。

だから街を移動する時、彼女がどうするかを聞いてみる。

「オレはお前についていくよ。知り合いもないし、何より お前は面白いからな」

この答えが当然である、という様に、シキはあっさりとそう口にした。

予想できなかった答えではなかったので、こちらも了承した。そして、次の日の朝に出発という事にして、今日はもう休む事にした。

こちらに背を向けて眠るシキの背中を眺めながら、俺は昼間に受け取った指令を思い出す。

指令の書いてある紙には、『マクスウェルが動き出した。至急、イル・ファンに向かい、動向を探れ』と書かれていた。

俺が所属している組織 アルクノア。

二十年前、事故でエレンピオスからリーゼ・マクシアに流れ着いた者達で成り立つ組織。

アルクノアの目的は、リーゼ・マクシアとエレンピオスを隔てる「断界殻^{シェル}」を管理している精霊の主 マクスウェルを抹殺し、エレンピオスへと帰還すること。

これが一応の目的とされているが、俺からすれば、最近はどうも活動内容が過激さを増している様な気がしてならない。

と、言うのも、俺達エレンピオス人には「ゲイト霊力野」が無いので、必然的に精霊術が使えない。

そんなエレンピオス人が使う「ゲイト霊力野」を使わない兵器　それが「ジン黒厘」である。

ただ、「ジン黒厘」は作動させた時に周囲の微精霊達を殺す。

マクスウェルはおそらく精霊達が死んだ事を感じたんだろう。だからその原因があるイル・ファンを目指す。

イル・ファンはラ・シュガルの王都。

アルクノアの指導者、ジランドが潜り込んでいる場所でもある。

ジランドとの仲は悪いが、これもエレンピオスに帰る為だと考えれば　まあ、多少は我慢できる。

しかし　いや、駄目だ、どうしても思考がネガティブな方向に向かっちゃまう。

「…外の空気でも吸つか」

俺は音を起てないように忍び足で部屋を出た。

シキSide

アルヴィンが外に出た後、私はベッドから体を起こした。

私は体は人間だが、一応精霊だ。睡眠や食事等は必要ない。意識すれば眠れるし、食事もとれるのだが、それらは余程の事がない限り行わないだろう。

私は死を司る精霊だ。

死は世界中に満ちている。

人間は言うに及ばず、虫にも、魔物にも、精霊にだって死は訪れる。

私はそんな死を触媒にしてこの世界に実体化している。マナは器である体が生成しているので、世界中の生命が死滅しない限り、私自身が消える事もないだろう。

閑話休題

枕元にあるナイフを取り出すと、目の前に翳してみる。

ナイフ自体は普通のナイフだ。ただ、妙にしっくり手に馴染むのが気になる。

まるで、昔から使っていたかの様に…。

そもそも、私は戦闘経験など全く無い。

なのに体が勝手に動く。これが一体何故なのか解らないが、知識に無くても体が覚えているという感じだった。

それに、近くに丁度良いお手本となるアルヴィンもいる。

私と違い、パワータイプであるアルヴィンの攻撃は私と正反対だ

が、学ぶ事が多い。魔物の動きに合わせた攻撃や防御、回避の方法をアルヴィンから見て学んでいる。

しかし、そのアルヴィンも心に深い闇を抱えている。

自分の生まれた世界とは別の世界に二十年も放り出され、裏の仕事も沢山こなしてきたのだろう。

私と話している時も一切油断していない。必ず手の届く場所に銃を置いてあるし、何より私を常に観察し、私の秘密を探っている様子が長い間傭兵生活をしている事を感じさせる。

へたに馴れ馴れしくされるより、余程安心できる。山賊がいる様な世界だ、親しくしたと見せかけて一突き、なんて事もある。

それが私の何かの琴線に触れたみたいで、何と云うか 捨てられた猫の様な印象を受けるのだ。

猫にしては、かなり体格が大きいけど…。

「ふふ、何を言ってるんだか、私は…」

思わず笑ってしまった自分に少々驚いた後、アルヴィンが戻る前に再びベッドに横になる。

明日は何かがある気がする。多少は休んでおいた方がいいだろう。

そう思いながら、私は意識を闇に沈めていった。

第3話 直死の魔眼（前書き）

原作入ろうとしたらもう一話かかりました（汗）

第3話 直死の魔眼

シキSide

一晩の休息の後、私とアルヴィンは出発前に少し体を動かしておこうという事になり、シャン・ドウの人気のない路地に移動していた。

「うっし……。ここでもいいだろ」

アルヴィンは適当な広さのある広場の真ん中に立つ。朝早いからか、周りに人はいない。

「さて、俺達は今日、イル・ファンに向かうわけなんだが……。二人での旅つてのは結構厳しいこともあるだろう。」

だから、そろそろ「共鳴^{リンク}」を使った連携を練習していた方がいい」

「共鳴^{リンク}」とは、リアルオーブを通して仲間の意識を感じとり、連携攻撃やサポートを行いやすくする技法である。

神から貰ったリアルオーブを目の前に持つてくる。

中に見える蕾はだいぶ開いて、完全に開花する寸前だった。

「リアルオーブの事や「共鳴」^{リンク}についての説明はあるか？」

「いや、大丈夫だよ。知識としてはちゃんと知ってる」

「そうかい……。じゃあ、まずは適当に的を作っておいだから、それを使って『共鳴術技』^{リンクアーツ}の練習だな」

アルヴィンは荷物の中から藁で作った人形を取り出すと、私の横に並ぶ。

「んじゃ、まずは「共鳴」^{リンク}を繋ぐぞ」

リアルオーブから青い小さな光が出てアルヴィンと繋がる。アルヴィンからは、「人形に対して左から回り込む様に移動する」という意思が伝わってきた。

この世界の魔物への一般的な対処の仕方は、挟み撃ちである。よって、私はアルヴィンとは反対の右側へと移動する。

「よし、いくぞー！」

アルヴィンが右手に持った剣を人形に叩きつける様に振り抜く。多少の重りが入れているのか、人形は地面から50cm程浮いた

所で一瞬、停止する。

「シキ！！」

アルヴィンの掛け声と同時に、落ちる人形を蹴上げて更に上へと浮かし、ナイフを構えて跳び上がると、腹部の辺りに突き刺し、地面へと叩きつける。

そして、アルヴィンから攻撃するという意思を感じたので素早く一歩後に下がると、倒れた人形にアルヴィンがとどめとばかりに剣を振り降ろした。

時間にして、約3秒程の出来事だった。

「うっし…、連携は上手い具合にできたな」

「なあ、アルヴィン。「共鳴」^{リンク}する重要性はわかるけど、オレは普通に斬った方が早いぜ？」

私の言葉にアルヴィンは溜め息をつく、私に呆れた様な視線を向けてきた。

「あのなあ、いつでももおたく一人で戦いきれる訳じゃないだろ？一人じゃ限界もある。今は平気かもしれないけど、やっておいて損はないと思うぜ？」

「ふん、そんなもんなのか？」

アルヴィンから更に深い溜め息が聞こえたけど、私は無視して新しい人形を取り出して準備する。

「んじゃ、次は『リンクアーツ共鳴術技』の練習だな」

先程とは違ってアルヴィンの隣に並ぶ。人形へと視線を向けて意識を集中し、アルヴィンと同時に行動を開始する。

「いくぞ！」

「そらっ！」

アルヴィンの『魔神剣』と私の『魔神剣・瞬牙』を合わせて巨大な衝撃波を作り出す。

「『魔神剣・龍牙！』」

衝撃波自体は巨大だが、スピードも速く、威力も高かった。当たった人形が粉々になったのだから間違いない。

「へえ、中々面白い技ができたな」

アルヴィンも満足そうに剣を仕舞ったので、私もナイフを帯の裏にある鞘に納める。

一対一の戦いに特化している“式”の戦闘方法からすれば、こつこつとした連携も後々大事になるだろう。先程のアルヴィンへの反論を思い出し、少し反省だ。

「よし、じゃあ、そろそろ出発の準備に　　アルヴィン？」

振り返ってアルヴィンへと声をかけるが、彼は険しい顔で目を閉じたり開いたりしていた。

「アルヴィン？　どうかしたのか？」

「い、いや……。なんかおかしくてさ」

「……？」

アルヴィンは周りを見渡すと更に顔を険しくする。

「なんだ、こりゃ……。線が沢山見える」

「　　っ！？」

私は反射的にアルヴィンの肩を掴んだ。
驚いた顔をしているアルヴィンの瞳を覗き込む。

「線…だと？ お前も直死の魔眼を使えるのか！？」

しばらく私の態度に驚いていたアルヴィンだが、珍しく慌てた様に私を引き離れた。

「ま、待て待て、落ち着けよ！！ だいたい、直死の魔眼ってなんだ！？」

私はアルヴィンの動揺を「共鳴^{リンク}」から感じ取り、とりあえず気持ちを落ち着ける為に軽く深呼吸する。

アルヴィンは周りを見ては落ち着かなさそうにしている。

おそらく、今まで見えなかった“線”が見えて戸惑っているのだ。

しかし、何故？

アルヴィンはさっきまではいつもの様に振る舞っていた。なのに、突然『死の線』が見える筈がない。何か原因が

私が思考する時の癖で視線を下げた時、首にかけていたりリアル

オーブが目にとまった。

リアルオーブ？

っ、そうだ、「共鳴^{リンク}」だ！！

私はすぐにアルヴィンと繋げたままだった「共鳴^{リンク}」を切る。

「アルヴィン、まだ線は見えるか？」

「いや、急に見えなくなっちゃった。…何だったんだ、あの線は？」

私は、一度宿屋の部屋に戻ってから話をする。とアルヴィンに言うて、二人で宿屋へと戻った。

部屋に戻った私達は、椅子に座るとテーブルを挟んで向かい合う。

「…で？ シキはあの線について何か知ってるのか？」

アルヴィンの問いに、私は頷くと、ナイフを取り出してテーブルの上に置いた。

「まずはあの“線”の正体からだ。簡単に言つと、あれは物の“死”が線となつて視覚化されたものだ」

「物の……死だと？」

私はテーブルの上のナイフを弄りながら頷く。

「万物には全て綻びがある。人間は言うに及ばず。物にも大気にも時間にだってだ」

私は自分の目を指差しながら続きを話す。

「オレの目はね　モノの“死”が見えるんだ。それがオレが持つ魔眼　“直死の魔眼”だ」

アルヴィンは一瞬考える様な仕種をした後、再び顔を上げた。

「モノの死が見えるっていうのは解つた。それがあの線だって事もな……だが、それが一体何になるんだ？」

「あの線を斬れば　そいつは死ぬんだよ」

「なっ…マジかよ!?!」

私は頷いて、テーブルの上に先程外から持ってきた拳程の大きさの石を置いた。

それをナイフで軽く切り付けるが、傷が付くだけで終わった。

「普通、こうやって石を斬っても簡単には斬れない。　　だけど」

私は目の前の石の死を視る。

そして、見えた線をなぞる様にナイフを動かすと、石は簡単に真っ二つになった。

アルヴィンが息を呑むのを感じながら、私はナイフをテーブルに置く。

「この魔眼を使えば、こんな風に簡単に斬れちまう。力なんていら
ない。死の線さえ見えるなら、オレに殺せないものなんてないよ。
そう」

生きているなら、神様だって殺してみせる。

その言葉に更に息を呑んだアルヴィンだったが、なんとか持ち直してテーブルの上の石を手取る。

切断面は綺麗で、とてもナイフ一本でやったとは思えない程だ。

「じゃ、じゃあ……俺もお前みたいにこんな事ができるのか？」

「それはわからない。そもそも、この魔眼は使いたくて使える様な代物じゃない。万物の死を理解しなければいけないし、無理矢理に視ようとすれば脳が負担に耐えられない。

この眼を使えるかは、完全に先天的な体質や相性の問題だ。

おそらく「共鳴^{リンク}」したことで一時的にオレの視界情報がそっちに伝わったんだ」

その後、試しに「共鳴^{リンク}」したアルヴィンが石の線を斬ってみたが、石は斬れなかった。

つまり、死を理解していない者にはただの線だらけの光景が見えているだけなのだ。

こうして、「共鳴^{リンク}」による意外な効果を見つけた私達は、予定よりも少し遅れてシャン・ドウを出発したのだった。

「どこまで見える？」

アル「なあ、もしかして、その魔眼を使って俺がエレンピオス人だ
って見抜いたのか？」

シキ「ああ、そうだ。オレの眼は視覚化にも特化してるからな。見
ただけで大抵の事はわかるんだ」

アル「へえ…、どこまで見えるんだ？　もしかして、服の中だけ盗
み見たりも…」

シキ「馬鹿だろ、お前。まあ、確かに男なんだから興味はあるかも
しれないけど、お勧めはしないよ」

アル「へえ、なんで？」

シキ「都合よくいく眼じゃないんだ。お前、死の線だらけの体を見
て、楽しいのか？」

アル「線だけを消す事はできないのか？」

シキ「だから、そこまで都合のいい眼じゃないんだよ。女の裸がみ
たいなら、彼女でも作るんだな」

アル「俺は別に女の裸が見たいなんて言っていないぜ？　懐に武器で
も仕込んでる奴がいるかもしれないから見えたら便利そうだな」
って思ったんだよ」

シキ「……………」

アル「いやいや、おたくも結構そっちの方の話に興味が」

シキ「…殺す」

アル「ちょ、おまつ！？お前が言つと洒落にならないから！！
い、俺が悪かったからナイフを抜くなって！！」

お

第4話 イル・ファンにて(前書き)

やっと原作開始!

第4話 イル・ファンにて

シキSide

魔眼の説明が終わって、私達は早々に宿を出ると、ラコルム海停を目指して街道を進んでいた。

道中で襲って来る魔物で「共鳴^{リンク}」の確認や、練習をしながら問題無く海停に到着し、船に乗ってイル・ファンを目指す。

夕日に照らされながら、私はぼんやりと地平線を眺めていた。

考えていたのは今後の事だ。

正直なところ、マクスウェルに会うのは気が引ける。

精霊の主と言われる程だ。私が精霊であることなど、簡単に見抜いてしまうだろう。

私は本来、この世界に存在しない精霊だ。その私がマクスウェルに接触するとなると、どうなるかわからない。

四大元素を司る四大精霊がバランスを保つこの世界において、私はバランスを崩しかねない存在だ。

最悪の場合、出会った瞬間に戦闘になる可能性もある。

そうなること　私はともかく、アルヴィンも巻き込まれる可能性が出てくる。

そのためにも、私の正体を教えるか否かを決めかねているのであ

る。

何れはばれる……しかし、できれば私の事は知られない方がいいのも事実だ。

アルヴィンが所属している「アルクノア」は強力で巨大な「黒厘^{ジン}」を使う為に、マナを集めているとも聞いた。

マナの塊である精霊の私は、絶好の標的になる可能性が高く、そうしなければただでは済まなくなってしまう。

私は溜め息をつくくと、目を閉じてただ風を感じる。

せめてイル・ファンに着くまでには答えを出さなければ……。

そう思った私は、次の瞬間、周囲の空気がガラリと変わったのに気が付いて目を開け、顔を上げる。

先程の美しい夕日は無かったが、それに負けない程の星空が広がっていた。

「夜域に入ったか……」

夜が長いという夜域の海域に入った事がわかり、私は手を握りしめると、アルヴィンいる船室へと向かった。

部屋に入ると、アルヴィンは銃の手入れをしながら目線だけをこちらに向けると、再び銃へと戻した。

「よう、何処に行つてたんだ？」

「別に、少し海を眺めてただけだよ」

「そうかい……」

それっきり二人の間に会話は無い。

しん、と静まり返った室内に、微かに波の音や、アルヴィンが銃の手入れをする音だけが響く。

「なあ」

「ん？」

そんな中、私は勝手に口を開いていた。

アルヴィンは手を止めてこちらに振り返る。

「お前、オレのこと、どう思う？」

「は？」

再び沈黙した室内で、私は口を開けて呆然としているアルヴィンと視線をぶつけていた。

数秒の間、アルヴィンは固まっていたが、はっ、とした様に額に手を当てると、目を閉じて溜め息をついた。

その顔が、何故かちょっと不快に感じて、思わず表情を険しくする。

「何だよ。そんなにオレが言った事は変な事だったか？」

「ああ、すげえ変な事だったよ」

アルヴィンは銃を近くのテーブルに置くと、私の方へと向き直った。

先程と違って何やらニヤニヤとしながら、私をじろじろと上から下まで眺める。

「まあ、俺からすればお前はかなり可愛い部類に入るよ。白い服も清楚な感じがするしな。でも、あえて言うなら薄着過ぎるから、あと一枚上に何か羽織れば」

「お、おい、待て。オレは別にそういう事を聞いてるんじゃない！

「！」

突然何を言い出すかと思えば　わ、私を可愛いなんて平気で言うとは……。

赤くなっているであろう顔を隠すためにアルヴィンに殴りかかるが、あっさりと避けられた。

「はは……、そう照れるなよ。お前も女の子だからな。そういう気持ちがあってもおかしくないさ」

「だから違つと……」

私の羞恥を知ってか知らずか　アルヴィンはしばらくの間、私の攻撃を避け続けた。

結局、数分のいざこざで精神的に疲れた私は、ベッドに俯せで倒れると、枕に顔を埋めていた。

「おいおい……拗ねるなよ」

「……つるやう」

アルヴィンは、私のベッドに背を預けて座り込んでいる。かなり激しい動きをした筈なのに、この男、息一つ乱していない。

まあ、私も乱してはいないのだけれど。

「…それで、質問の答えは？」

私が顔を上げながら言うと、アルヴィンは、んぐ、と考える仕種をした後、こちらを向いて優しげに目を細めて笑った。

「一言で言えば“変な奴”だな」

「なんだ…それ」

「そのまんまの意味だよ」

「……………」

私は再び枕に顔を埋めながら溜め息をついた。
アルヴィンは笑いながら私の頭を何度か撫でる。

「ついでに、意外と女の子らしいなって思ったよ」

「…っ！？」

私は顔が熱くなるのを感じ、それを振り払うかの様に右手でナイフを抜くと、枕の隣に突き刺した。

ザクツ、という布や中の綿を裂く音が聞こえたが、気にせずは何回も突き刺した。その度に、ザクツ、ザクツ、という音がする。

頭に置かれたアルヴィンの手が一瞬、びくり、としたが気にしない。いつまで頭を撫でるのか、と思いもしたが、何気ないその動作が何故か心地よく、私はしばらくそのまま何も言わなかった。

その後、私は結局、自分の事を言い出せないままイル・ファンへと到着。

アルヴィンは情報を集めに出掛け、私は宿屋で帰りを待つことになった。

窓から外を眺めながら小さく息を吐く。

この街はシャン・ドウと比べると、だいぶ発展した街だと思う。街灯もあるし、建物もきちんとした鉄筋制であり、精霊術を使っただ様な製品が売られている。

シャン・ドウが部族的な印象を受けるならば、イル・ファンは機械的…もしくは現代的、と言えはいいのだろうか。

私の前世の世界に限りなく近いと言える。

そう思った時、ふっ、と一瞬だけ街から明かりが消えた。それと同時に感じる巨大な気配。

四つの巨大な精霊の力を伴って、大きな反応が一つ……。間違いはない。これが精霊の主、マクスウエルだろう。

しかし、私は下手に動かずに、アルヴィンが帰るのを待つ事にした。

このまま外に飛び出して、マクスウエルと鉢合わせになった挙げて、句に戦闘にでもなったら洒落にならない。

できるだけ気配を殺しながら、私はカーテンの隙間から街の様子を見る。

絶えず行き交う人々を眺めつつ、私はその時まで待つ。

しかし、なぜだろう……。嫌な予感しかしない。

こう言つとなんだが、私の予感によく当たる。

それが良い事にしろ悪い事にしろ、私にはあまり関係がないと思っっているが、今回ばかりはどうしようかと悩む。

そんな感じで悩んでいると、突然、研究所らしき場所から爆発音の様な音が聞こえた。

同時に四つの精霊の気配も完全に消える。

「嫌な予感によく当たるわね」

そう呟きながら、私は宿屋を飛び出した。

がやがやと野次馬が集まる港へとやって来た私は、手頃な出店の屋根に飛び乗ると、騒ぎの中心に目を向ける。

そこには倒れている赤い鎧の兵士が数名と、それを治療している術者が一人。

その向こうには正に今、出発した船が見えた。

目を懲らせば、甲板にアルヴィンと、一束だけ跳ねた髪型の金髪の女性、そして黒髪黒服の少年の姿が見えた。

兵士達が必死に船を止めようとするが、船は止まらずにどんどん遠ざかる。

私は袖のしたから隠していた小さい投擲用のナイフを取り出すと、全力で船へと投げた。

少女の体をしていても、私の中身は精霊だ。

ナイフは丁度、アルヴィンの近くに刺さる。

アルヴィンはナイフに気付くと、私の方に顔を向ける。白い袖だからすぐに気付いたようだ。

両手を合わせて謝る様な姿を見せたので、とりあえずサムズアップする。

安心した顔になるアルヴィンにそのまま腕を半回転。親指を下にして横に思いつきり引いた。

顔を青くするアルヴィンに乗せた船が出港するのを見送りながら、とりあえず次に会ったらどうしてやるうかを考えながら、私はその場を後にするのだった。

『スキット』

「アルヴィンの忘れ物」

アル「……はあ」

ミラ「どうしたのだ、アルヴィン？ 先程から溜め息ばかりだな」

アル「おっと、ミラ様か。脅かさないでくれ」

ミラ「堂々と近付いたのに気づかないお前が悪い。…それで、先程の問いには答えてくれないのか？」

アル「ああ…いや、たいした事じゃないんだ。ちょっとイル・ファーンに忘れ物があったさ……」

ミラ「ふむ、忘れ物か。大切な物なのか？」

アル「まあ……一応はな。でもまあ、大丈夫だろ。あいつならすぐ

に追い掛けてくるだろうし……」

ミラ「……？ お前の忘れ物とは、動物なのか？」

アル「ああ……寂しがりな兔ちゃんだよ」

第5話 赤い服の少女（前書き）

ちよつとオリジナルの話。

第5話 赤い服の少女

シキSide

アルヴィン達が乗った船が見えなくなった後、私は一度宿屋に戻ると荷物を纏めてすぐに出発できる様に準備をした。

荷物といっても、私の所持品はいくつかのグミとライフボトルが二つ、そしてナイフだけである。

道具は全て袋に入れ、ナイフはいつもの様に腰辺りの帯の裏に隠す。

それから、投擲用の小さいナイフをいくつか袖の中に隠した。

「さて…」

振り返って椅子にかけてある赤い上着を見つめる。

たまたま出店で目に留まった革製の赤いジャンパー。

それがあの“式”が着ていた物とそっくりで、ただでさえ少ない所持金を更に少なくするのを承知の上で購入した。

そもそも、私に食費や宿泊代は殆どかからないだろうから所持金

は増えていくだけだ。こういう事に少しでも使っていくくらいが丁度いい。

上着を羽織り、部屋から出ようと扉に手をかけた時、私の耳が不思議な音を捉えた。

「…なんだ？」

それは鈴のようで　しかし、決して人間が作る事ができない音。

これは　精霊が使う言葉？

部屋の窓を開けてイル・ファンの街中を見渡しつつ、音の発信源を探す。

頻繁に鳴り響く音は、まるで焦っているかの様に聞こえる。

しばらく街を見渡していると、漸く精霊が集まっているらしい気配を見つけた。

魔眼で視てみると、細い路地に入る道の入口に精霊が固まっているのがわかる。

精霊は、一見光の玉の様に見えるが、よく視ると炎が燃えているかの様に陽炎が揺らめいている。

おそらく火の精霊達なのだろう。

私は宿屋を出ると、その路地に向かって歩き出した。

赤い服の少女Side

くそつ、しくじった!!

任務で、イル・ファンにあるっていう新兵器の情報を得る、または可能なら奪うっていう目的で、私はここにやってきた。

研究所に侵入して、警備の一人をボコボコにしてやってからカードを奪い、端末機から情報を得ていた私は、突然現れた私と同じ二人の侵入者と戦闘になった。

一人はなよなよした私より少し年上ぐらいの黒服の男だった。

戦闘経験はあるみたいだったけど、私からしたらただの雑魚だった。

装置に繋がれた人間が死んでしまった光景を見て、怯えた表情をしていたのが堪らなく愉快だったのを覚えている。

ただ、中々しぶとくて苛々していたところに二人目の侵入者である金髪の女が現れた。

動きやすさを重視したかのような露出の多い服に、一束だけ横にはねた髪が特徴のその女は、私より後に精霊術を発動させたはずなのに、私よりも遥かに強力な術を放ってきた。

そして、そのすかした顔が気に入らなくて、私は杖を振り上げてその女に向かって行った。

しかし、女が手を振り上げると同時に、私の目の前には巨大な炎でできた生き物が現れた。

一瞬、魔物かと思ったけど、そんなちやちなもんじゃなく、もつと上の存在。

私が、それが炎の大精霊「イフリート」であると気づいた時には、既に私は床に倒れていた。

あの女が陛下が言っていたマクスウエルなのか？

そこで意識を失った私が目覚めたのは割とすぐだった。

大きな爆発音で目が覚めた私は、急いで研究所の脱出を開始した。

何があったのかは知らねえけど、警備の奴らの大半は新兵器の保

管所に向かったから、私はすぐに出口までたどり着いた。

しかし、出口が目前で油断したのか、それとも戦闘のダメージが思ったよりも大きかったのか…。最後の最後に警備の奴らに見つかってしまった。

咄嗟に精霊術を使って牽制した後走り出したが、あの女との戦闘で足を捻りでもしたのか、右足が妙に痛みやがる。

なるべく人目を避けて狭い路地に逃げ込んだけど、警備の奴らはそこまで追い掛けてきてやがる。

くそっ！！ あの妙な女に出会わなかったらこんな事にはならなかったっていうのに！！

ア・ジュール側の人間である私がもし、ここで捕まりでもしたら、私は間違いなく殺される可能性が高い。

ただでさえ今のア・ジュールとラ・シュガルの対立は激化してるんだ。私が捕まった事がきっかけで戦争が始まりでもしたら陛下に迷惑がかかる。

もし、そうになったら私は……きっと、死んでも死に切れない思いで一杯になっちゃう！！

路地の先は建物の間に来たそこそこ広い空間があった。ただ、その先に道はない。所謂行き止まりってやつだ。

「…チツ、こんな時に」

全力で走っていたから忘れてたけど……今の私はあの女との戦闘による傷があちこちにできていて……正直、立っているのも辛い状況だ。

右足なんて、無理して走り回ったりしたからか痛みが半端じゃない。

「よう、観念してもらおうか、侵入者のお嬢ちゃん」

「っ!?!?」

振り返った先には、五人の鎧を着た兵士。

武器は槍と楯をもった奴が三人、杖を持つてる奴が二人……か。

私は無言で自分の武器である仕込み杖を構える。

「おいおい、そんなボロボロの状態で俺達とやるつもりか？」

「はんっ、テメエらみてえな雑魚には丁度いいハンデだよお!！」

鎧を着た兵士たちは肩を震わせて笑いはじめる。

クソッ、いつもなら瞬殺できるくらいの雑魚のくせに、いい気になりやがって!！」

「なあ、こいつ、捕まえたらちよつとだけ楽しんでから連れていっていいよな?」

「くくく、そうだなあ、最近、そういう事してないからな!」

「ははは、どうせ犯罪者だ、気にすることあねえぜ!」

奴らの会話を聞いて吐き気が込み上げてくる。

何処に行つたつてこつこついう馬鹿な奴らはいなくならんんだな。

「おい、いいからかかつてこいよ。このクソ野郎ども!」

私が杖を構えると、兵士達は大袈裟に怖がるふりをして私の苛々を加速させる。

「おお怖え、そんなもの振り回したらいけないってママから教わらなかつたのか?」

「ッ、テメエ……」

今の言葉で私は完全にキレていた。

私の前でその単語を出したこと、後悔させてやる!!

「おらぁー!!」

目の前の兵士の一人に走り込みながら杖を突き出す。目の前の兵士は楯で私の杖を防ぐ。だが、甘え!!

「おらぁ、燃えちまいな!!」

杖についている刃が開き、炎が巻き上がる。

「うおお!?!」

「アハハハ、燃えちまえ!!」

炎に驚いた兵士を庇う様に、両サイドにいた兵士達が槍を突き出してきたので、杖を楯にして防ぐ。

「痛ッ!?!」

けど、右足からの痛みで一瞬体から力が抜けちゃった。戦場じゃあ一瞬の油断が命取りになる。

「おらぁあー！」

「な、しまっ」

私の一瞬の隙について、目の前の兵士に楯で殴られて吹き飛ばされた。

予想以上に力が強く、地面を一回バウンドした後、行き止まりの壁に背中を打ちつけた。

「がっ!？」

その時の反動で仕込み杖を手放してしまい、男達の前に転がった。男達は私の仕込み杖を路地の入口…つまり背後に蹴って遠ざける。

クソッ、どうする!？ 精霊術は詠唱する時間がないし、武器もない…!

何より、体中が痛んで動かせない。本格的にヤバいな、こりゃあ…。

「やれやれ、やっと大人しくなりやがったな…」

「まあ、すぐに鳴いてもらっただけだなあ…！」

「ぎゃははは、それもそうか…！」

「ちく……しょう……っ……！」

目の前に迫る兵士の男の手を睨みながら、私はそう呟いた。

そんな時、路地裏の静寂を破る音が響いた。

カッン、カッンというブーツが地面を叩く音が聞こえる。

目の前の男達もびたり、と動きを止める。

私は僅かに動く首を動かして路地の入口を見た。

そこにいたのは一人の人間だった。

薄暗い路地を歩いてくるため顔はわからない。でも、妙に存在感のある雰囲気を感じた。それは、躊躇うことなくこちらに歩いてくる。

月明かりで、足元から少しずつ明らかになる姿は、ハッキリ言えばおかしな格好だった。

見たことない白い服の上に、赤い革製のジャンパーにブーツ。バランスが微妙なくせに妙に雰囲気に合う。その為か、私は一切動かず いや、動けずにその動作に意識を向けていた。

「なんだ、お前？」

目の前の兵士の声で、そいつは顔がぎりぎり月明かりで見えない位置で立ち止まる。

何となく、そいつの顔が見れなかった事を残念に思っ自分がいた事に内心驚いた。こんなの、私らしくねえ…。

「……………」

そいつは何も答えず、ただそこに立つたまま微動だにしない。

男達は視線だけで頷き合つと、杖を持った二人が私の近くに移動し、槍を持った三人が近づいていく。

「おい、何の用だ！！俺達は仕事なんだ、一般人はとつと帰れ！！」

男達の一人が怒鳴るが、そいつはやはり動かない。

ただ、少し呆れた様な、面倒臭い様な雰囲気を感じられた。

「オレは落とし物を届けに来ただけだ。お前らに用はないよ」

初めてそいつが口を開いて、凜、とした声が路地裏に響いた。

そいつは再び歩き出した。隠れていた顔が月明かりで照らされて見える様になる。

思わず、見とれちゃった。

私と同じか、それより少し暗いくらいの灰色の髪。

一切の感情を伺えない漆黒の瞳は眠そうに半開きだ。

でも、それが逆に憂いを帯びているみたいで……なんというか……芸術ってこういうものを言うんだろっな、って感じた。

顔立ちや声からは男か女がよくわからない。

けど、どちらでも決して違和感がない程、そいつは自然体だった。

ふと、そいつが手に何かを持っている事に気づく。

私の仕込み杖だった。

「
や
」
「
おいおい、今仕事中心だっただろ。痛い目にあいたくなくけり
」

そいつ言って伸ばされた男の手を、そいつは掴んだ。

それからは一瞬の出来事だった。

腕を捕まれた男の体が、鎧を着ている事を忘れているんじゃないか、というくらいに吹き飛んだ。

「え？」

隣にいた男達の間をすり抜けて、吹き飛ばされた男は壁に激突したかと思うと、そのまま倒れて動かなくなった。

「て、てめえ！！」

たっぷり五秒ぐらい経ってから、漸く目の前で起きた事を理解したらしい男達が二人同時に槍を突き出す。

けれど、そいつは右手を腰辺りにそえたと思った瞬間、目に見えない程の速さで腕を振るった。

私はぎりぎり見えたけど、とんでもなく速かった。陛下　ガイ
アスとならどちらが速いだろう？

そして、そいつが手に持ったナイフで男二人の武器と打ち合う事はなかった。

男達の槍は、一瞬でバラバラにされちまった。

そして、驚愕で目を見開く男達の頭を、そいつは躊躇なく蹴り飛ばした。

二連続のハイキックは、正確に二人の頭を捉え、二人とも無言で崩れ落ちる。

あの動きにくそうな服でよくあんな事ができるな…。

「くそつ、これでもくらえ!!」

すると、私の近くにいた二人が火の精霊術、「ファイアボール」を放った。

そいつは蹴りを放って背を向けていた体をこちらに向ける。

その時、そいつと目が合った。

そこには、あの漆黒の瞳は無く、妖しく光る蒼い瞳があった。

男二人はそいつがファイアボールを避けない事に安堵したのか、余裕の表情をしてやがった。

そして、あと少しでぶつかるといふ時、そいつはナイフを持った右腕を振り上げる。

ただ、それだけ。

ただ、それだけで、目の前に迫っていた火の弾は、あっさりと霧散した。

「 なっ!?!? 」

「 馬鹿な!?!? 」

二人が驚愕している隙に、そいつは跳んだ。

軽くステップを踏むかのような小さな踏み込み。

しかし、それだけで、そいつは間合いを完全に詰めた。

男達が抵抗する隙も与えず、そいつは先程と同じ様に、回し蹴りで二人ともあっさりと沈めてしまった。

体の痛みを思わず忘れてしまった私の前にそいつは歩み寄ると、左手に持っていた私の杖を差し出してきた。

「 これ、お前のだろ? 」

「 え、あ? 」

混乱した頭では、なんと反応していいのか解らず、呆然としてい

る私を、そいつはしばらく見詰めていたが、突然、懐から白いハンカチを取り出すと、私の頬を拭い始めた。

「え、あ…ちょ…」

「動くな、血が出てる」

「……………」

何の抵抗もしない私の頬を、そいつはしばらく拭い続け、やがて立ち上がると私に手を差し出してきた。

「立てるか？」

「お、おう」

差し出された手を掴み立ち上がる。

しかし、右足に走った痛みに思わず顔をしかめると、そいつは何も言わずに私の右足をそつと触る。

「腫れてるな。冷やした方がいい。お前、歩けるか？」

「それくらい…痛っ!？」

自力で歩こうとしたが、やはり右足の痛みは半端じゃなかった。

「おい」

私が俯いて舌打ちしていると、目の前のそいつから声をかけられて、顔を上げると、こちらに背を向けて屈んでいた。

「……何してんだよ」

「お前、歩けないんだろ？連れてってやるから 乗れ」

そう言ってこちらを見るそいつの目は、もうさっきみたいに蒼くなくて、元の漆黒の瞳に戻っていた。

「おい、私は一人で歩け……」

「いいから、乗れ」

「……」

いつもなら怒鳴り散らす筈なのに、何故かこいつにはできなかった。

無言でそいつの背中に体を預ける。

私と同じくらいの身長にくせに、私を背負っても平然と歩いているこいつの背中で、私は歩く度に感じる振動を心地好く思いながら、いつの間にか眠ってしまった。

服越しに感じたそいつの背中は 温かった…。

第6話 アゲリアと…（前書き）

二次小説が書けなくなるかもと聞いて、テンションが下がりがまくっている今日この頃……でも執筆はやめない！！

第6話 アグリアと…

- シキSide -

路地裏で赤い服の少女を助けた私は、一度宿屋に戻ると、いつの間にか寝ていた少女をベッドへと寝かせる。

そして椅子に腰掛けると、これからどうするかを考える。

この少女は間違いなく犯罪的な何かをやらかしたに違いない。そうでなければ警備員に追いかけて回されるなんて事にはならないだろうし。

まあ、それはいい。別に誰が何をしようと私には関係ないのだが、問題は少女を追い掛けていた警備員が数時間前に爆発騒ぎが起こった研究所の人間であることだ。

あの事件にはアルヴィンが関わっている。それならば、この少女から何かしらの情報を得られるかもしれない。

仮に情報を得られなくても私は女、子供には優しくありたいと思っっているから、一応家まで送っていくつもりなだけだ…。

さて、まだ少女は起きないみたいだし、少し動いたからシャワーでも浴びてこようかな。

私は赤のジャンパーを脱いで椅子にかけると、そのまま浴室へと向かった。

- 赤い少女Side -

柔らかい感触を背中に感じながら、私は目を覚ました。
どうやら私はベッドに寝かされてるみたいだ。

最近は何事ばかりでちゃんとしたベッドで寝てなかったから、もう少しだけまどろんでいたけれど、そうもいかねえ。

急いでガイアスに今回の任務の報告をしねえといけないし、でも、あと少しだけこの感触を…。

そう思った時、右足を誰かの温かい手が掴んだ。

その瞬間、私は跳ね起きて私の足を掴んでいた奴を押し倒していった。

腕を押さえて馬乗りになり、相手を拘束する。

「テメエ、何者……………だ？」

私が押さえ付けているのは、あの路地裏で私を助けてくれた奴だった。

問題はそいつの格好で、若干濡れた髪とほんのりと朱に染まった肌からおそらく風呂上がりなんだ、ってわかる。

けど、そいつは薄いシャツの様な服を一枚羽織っているだけで、ボタンも何もないため、押し倒した衝撃で胸元が露出している。

そこから見える小さくても形がいい二つの山がこいつが女であることを主張している。

髪や服が乱れているせいで、なんと云うか………すげえエロい。

「……………」

「……………」

お互いに言葉はなく、ただ静寂な時間が続く。

私は傍から見れば自分より少し年上の女を押し倒している様な格好で、今更だけど………すげえ恥ずかしい。

しかし、こいつが何者かわからない以上、油断してたら危険だ。私は顔が赤くなりそうなのを抑えながら、そいつを睨み続ける。

「……………足」

「……………あ？」

そいつは無表情のまま、首だけを動かして私の右足を見る。

「右足、まだ痛むだろ。大丈夫なのか？」

そいつの言葉で、思い出すかのように右足に痛みが戻ってきた。この体勢、膝立ちだけど右足首にも少なからず体重がかかる。痛みを感じた瞬間、思わず目に生理的な涙が溜まるが、私はあえて何でもない様に振る舞う。

「ふん、痛くも痒くもねえよ」

「涙目で言われても説得力ないぞ」

「……………」

な、何も言えなくなっちゃった!!

どうする…このままじゃいつまでもこのままで動けねえし……。

「…仕方ないな。よっと」

「なっ!？」

そいつが一言呟いた瞬間、私はベッドに放り投げられていた。視線を奴に向けると、床に倒れたまま何かを投げた体勢になっていた。

倒れた状態からの反撃技か!?

「…くっ!？」

ベッドに尻餅をつく形で落ちた私は、急いで構えをとる。

しかし、そいつは襲ってくるでもなく、乱れた服を正し、髪をタオルで拭いていた。

「…オイ!! てめえ、一体何者だ!! 私をどうするつもりだ!!」

そいつは髪を拭き終えた後、路地裏で見ただ白い服を着て椅子に座ると、今だに構えたままの私に視線を向ける。

「オレはシキ。ただの傭兵だよ」

そいつは一言、そう名乗った。

シキSide

とりあえず、少女の足を治療しようとして彼女の足に触れた瞬間、目を覚ましていた少女に押し倒された。

私を警戒しているなら当たり前だけど、少女のような小柄な体型では私を押さえるには力が足りない。それに体重も軽い。いや、このくらいの歳だと若干軽すぎる…か？

少し、少女の生活を心配しつつベッドに放り投げた。

その後、なかなか構えを解かない少女に、とりあえず自己紹介をした。

少女は、若干戸惑いながらもまだ少しも警戒心を解いていない。それが当たり前だし、悪いとは言わない。

私もそうやって少し警戒している人間の方が接しやすかったりする。

「とにかく、足を見せる。このままだと酷くなるかもしれないぞ？」

「……………」

少女はまだ私を睨んだまま動かない。

「…なんだ、オレが傭兵なのを気にしてるのか？ 安心しろ、金は
いらなからさ」

「……はあ」

少女は溜め息をついた。どうやらどうでもよくなったらしく、構
えを解くとベッドに腰掛けて右足をこちらに向ける。

ちやつかり武器を右手に持っているのは仕方ない事なのだろう。

「少し触るぞ？ 痛い場所があれば教える」

「…お、おう」

緊張しているのか少し上擦った声で返事をした少女の足首を、で
きるだけ優しく撫でていく。

「…痛っ」

「ここか？ 骨には異常がないから、もしかしたら靭帯を痛めてる
のかもしれないな」

「…じん、たい？」

「骨と骨をつないで、関節の運動を滑らかにしたりする繊維性の組
織だ」

「へえ……」

とりあえず荷物の中から固めの包帯を取り出して足首を固定する。

「簡単な処置しかできないから、一度病院で診てもらえ」

「……おう」

私が包帯を片付けていると、少女が足首に巻かれた包帯を見ながらぼつりと呟いた。

「なあ……お前、私の事……その……聞かないのか？」

少女の方に顔を向けると、少し緊張した様子で俯いている。

「別に……お前が何処の誰かなんて事には興味がないんだ」

「じゃあ、何で……」

「小さな女の子が男に襲われてた。それだけで助けるには十分な理由だ」

ああ、そうだ、と私は再び荷物を片付けながら呆然としている少女へと声をかける。

「名前、なんていうんだ？ 流石にいつまでも『お前』って言うわけにもいかない」

少女は少し顔を赤らめながらそっぽを向くと、口を小さく開いて名乗った。

「……アグリアだ」

言葉遣いが悪くて、他人との関わりたがらない様子のこの少女の年相応の反応に、私は思わず小さく声に出して笑った。

「…な、てめえ、今笑いやがったな!？」

「ああ、あまりにもアグリアの反応が面白くて、可愛いから笑ってしまったんだ」

「か、かわっ／＼／＼」

私は再び笑う。今度はさっきよりも大きな声で。

ああ、そういえば シキになってから、私は初めて心の底から

笑った気がする。

とりあえず、まだ足が痛むアグリアを宿に残し、私は街の様子を探ってみる事にした。

アグリアによれば、街を出てすぐの街道に乗ってきたワイバーンがあるらしく、それを使ってカン・バルクに戻るつもりだという。

街中にはまだ至る所に兵士が立っていて、迂闊に動ける状態ではない。

更に、先程アグリアの特徴を纏めた写真無しの手配書もあった。私の手配書はなかったから、まだ私の事は伝わっていないようだ。

街から街道に出る為の出入口を物陰から観察してみる。

兵士が四人、通行人の顔を見たりしながら忙しく動いている。

このままでは街から外に出る事ができない。

強行突破という手段もあるが、それでは追跡されてワイバーンが飛び立てない可能性もある。

そうになると、やはりどうにかして兵士をやり過ごすしかないか…

「……とりあえず時間もなし、一番手っ取り早い方法は 変装

か
」

私は直ぐさま近くの服屋に入ってしまった。

「おい……まさかとは思いが、私にコレを着ろっていうんじゃないかねえ
だろうな？」

宿屋に戻った私は、早速アグリアに状況を説明して買ってきた服
を渡した。

アグリアも作戦内容に反対はしなかったものの、渡された服の入
った紙袋の中を見てから盛大に顔をしかめている。

「仕方ないだろ。アグリアに丁度いいサイズがその服しかなかった
んだ」

「いや、だからってコレは……ねえよ」

アグリアの腕の中には、フリルのふんだんに使われた所謂ゴスロ

リの衣装が握られている。

気持ちはわからなくもない。しかし、本当に他に服が無かったのだから仕方ないだろう。

「とにかく時間がない。少しの間だけ我慢してくれ」

「ぐっ……し、仕方ねえな……クソッ、なんで私がこんな目に……」

服を持って浴室へと入って行くアグリアの背中を見送り、私も荷物を全て背負う。

しばらくして、アグリアが部屋に戻ってきた。

顔を真っ赤にして俯いているが、ハッキリ言って凄く似合っている。目つきが悪いのを治せば人形の様に見えるくらいだ。

「似合ってるじゃないか。これなら大丈夫そうだな」

「そ、そうか……でも、何だか落ち着かねえ……／＼／」

「あ、口調に気をつけてとけよ？」

「……わかってる。って言うかお前に言われたくねえ」

それから私達は急いで宿を出て街の出入口へと向かう。

アグリアの足は、わかりにくい様に包帯を巻き直して、なんとか歩く事はできる様になった。

出入口で兵士の一人が私達を見て近づいて来た。

「その二人、この先の街道には魔物も生息している。二人で大丈夫なのか？」

アグリアがいつもの様に睨みつけそうになるのを、私が肩をさりげなく叩く事で抑える。

アグリアは一瞬だけ私をジト目で睨んだ後、兵士に向けて微笑みかける。

「心配して下さり、ありがとうございます。しかし、私には腕の立つ傭兵である彼女がいますから、大丈夫です」

ねえ？、と私に視線を向けてきたので、私は頷いて返事をした。

「そうか、呼び止めて悪かったな」

「いえいえ、お勤め、ご苦労様です」

最後にアグリアが最大級の笑顔を兵士に向けて、私達二人はイル・

ファンを脱出した。

街道に出てしばらく歩いた頃、アグリアが最大級の溜め息をついて、だらりと正していた姿勢を崩す。

「はあく、もうやらねえぞ、あんな事!!」

「そうか？結構似合ってたんだけどな」

「ふざけんな!! あんなの私には合わねえよ!!……ああ、思い出したら鳥肌立ってきた」

街道の真っ只中で着替える事もできないので、アグリアはカン・バルクまではそのままの格好で行くらしい。

ついでに、私もカン・バルクまでついて行って、そこでアグリアからワイバーンを借りる事になった。

「ワイバーンか、オレは初めて乗るけど、どんな感じなんだ？」

「あ?……ああ、慣れるまでちょっとばかり辛いけど、慣れちまえば楽しいぞ?」

「へえ、楽しみだ」

私達は二人でワイバーンに跨がると、星の瞬く空へと舞い上がった。

『スキット』

「アグリアの口調」

シキ「なあ、アグリアは何でそんな荒っぽい口調なんだ？」

アグ「ああ？何だよ突然…」

シキ「いや、さっきみたいな口調ならもっと可愛らしくなるのに、
と違ってさ」

アグ「はっ、別に私はそんな柄じゃねえよ。それに、これは昔から
なんだよ。今更変えられるかってんだ」

シキ「そうか…（その割には違和感なく喋ってたけどね）」

アグ「お前の口調も昔からじゃねえのか？」

シキ「さあね…」

アグ「ああ？ おい、コラー！ 私はずわざわざ答えてやったのに、
お前は答えねえのかよ！？」

シキ「別に、アグリアが勝手に答えただけじゃないか」

アグ「チツ、何で私は答えちまったんだ……」

第7話 ア・ジュール首都、カン・バルク（前書き）

ガイアス、登場！

第7話 ア・ジュール首都、カン・バルク

シキSide

ワイバーンに跨がったままの私達は、分厚い雲の中を突き進んでいた。

これから向かう場所はア・ジュールの首都、カン・バルクである。

リーゼ・マクシアは、大きく分けて二つの国に別れている。

精霊術を研究し、技術的に発達した国『ラ・シュガル』

民族的文化を重んじ、古代の文化が残る国『ア・ジュール』

私達が出発したイル・ファンはラ・シュガルの王都であり、ラ・シュガル王 『ナハティガル』が政治を行っている。

そして、私達が向かっているカン・バルクには、ア・ジュール王『ガイアス』が住む城がある。

ラ・シュガルは貴族や身分を中心に物事を決める節があるが、反対にア・ジュールでは実力次第ですぐにでも出世ができる。全くもってお互いに正反対の考え方を持つ国なのである。

考えに耽っていた私は、突然ワイバーンが高度を落とし始めた事に気づいた。

気温の変化を感じにくい私にはわからないが、私の前に座っているアグリアのはく息が白く見えることから、あと少しで目的地につくのだとわかる。

舞い落ちる雪を追って視線を下に向けると、辺り一面が真っ白な雪原が広がっている。

私が生まれ落ちた場所であり、アルヴィンと出会った場所…。
シャン・ドウとカン・バルクの間位置するモン高原だ。

この世界に生まれてから、まだそれ程時間は経っていないのだが、随分と久しぶりにこの場所を見た気分になる。

それから程なくして、私達の目の前に大きな城が見えてきた。
正に王が住んでいると言わんばかりの立派な城である。

城を囲む様に並ぶ城下街には明かりが灯り、雪の舞う中ではとても幻想的に見えた。

城下街の上空を飛び、城の前にある広場にワイバーンを降ろすと、アグリアを支えながら飛び降りる。

すると、ワイバーンの到着を見て兵士の一人が駆け付けてきた。

「任務、お疲れ様でした!!」

「おう……そうだ、陛下は城にいらっしやるのか?」

「はっ!!只今、玉座の間にてウィンガル参謀長殿と会議中であり
ます!!」

それだけ聞くと、アグリアは私を手招きで呼んだ。

「今から私は陛下に任務の報告に行く。悪いけど、お前も一緒に来てくれ。色々と説明しなくちゃいけないからさ」

「ああ、わかった」

頷いた私に背を向け、アグリアは「ついて来い」と言うと、城の中に入って行く。私は遅れない様にその後をたいて行った。

長い廊下を進んだ先に一際広い空間があり、そこには玉座が一つ。

そこに、黒髪を肩辺りまで伸ばし、真っ赤な鎧を身につけた男が座っていた。

彼こそがア・ジュール王、ガイアス。

背筋を伸ばし、堂々としたその力強い姿からは、正に王としての威厳が醸し出されている。

その隣に、全身黒一色の男が立っていた。

サラサラとした黒髪と、その髪と同じく漆黒の衣服に身を包んだ男。その服には片方の肩にだけ翼の様な装飾があらわれている。

私とアグリアは、玉座へと繋がる階段の前までやって来ていた。

「戻ったか」

ガイアスの言葉に、アグリアが方膝をついて頭を下げる。

「只今帰還致しました、陛下」

「御苦労だったな。早速だが、任務の報告をしてもらおう」

「はい、イル・ファンの研究所に潜入したところ」

アグリアがガイアスに報告している間、私はアグリアの後ろで柱に寄り掛かって目を閉じて静かに待っていた。

「以上です」

「…成る程、報告御苦労。次の任務まで怪我の治療を含めてしっかり休んでおけ」

「はい!!」

ガイアスにだけ敬語ではきはきと話すアグリアを眺めていると、不意にガイアスが私の方を向いた。

「アグリア、その者がお前を助けたと言う者か？」

「あ、はい……おい、シキ!!陛下に挨拶しろ!!」

呼ばれたので、取り合えずアグリアの隣に移動してガイアスを見上げる。

「オレはシキ。一応、傭兵をやっている。あんたがガイアスだな？」

「お、おい…シキ!!陛下に向かってその態度は」

「アグリア、構わん。シキといったな。アグリアが世話になった、

俺からも礼を言おう」

いつものように自然な態度の私に、アグリアが睨みつけてくるが、ガイアスがそれを制した。

「別に…。アグリアを助けたのは気まぐれだだよ。礼を言われるほどじゃない」

「ふっ…、そうか」

お互いに視線を交わし、そしてニヤリと笑う。

ア・ジュール王、ガイアス。中々面白い奴じゃないか。

「シキ、今日はもうそろそろ日が暮れる時間だ。よければ城に泊まっ
つていくがいい」

「へ、陛下…!?!」

アグリアが驚いた様にガイアスの方を向く。

普通は、見ず知らずの傭兵なんかを城に泊めるなんて事は有り得ない事なんだろう。

ガイアスの隣にいるウィンガルも、少し顔をしかめている。

「アグリア、お前はシキに窮地を救われている。それならば、それ

相応の恩を返さねばならないだろう」

「そ、それは……」

バツが悪そうに視線を逸らしたアグリアに、ガイアスが微笑む。

「それに、そのような可愛らしい服まで買ってもらったのだ。礼をしなくては失礼というものではないか？」

「…え、あ……？」

ガイアスの言葉で漸く思い出したのか、自分が着ている服に視線を落とすアグリア。

「~~~~っ!?!?..?」

そして、一気に顔を赤くしたかと思うと、私の背中に隠れる様に回り込んだ。

「や…その…へ、陛下…これは…!」

ガイアスは、今度は少し声を出して笑っていた。その横で、ウィンガルも顔を逸らしながら笑っている。

「お、おいこら…ウインガル!! てめえまで笑うんじゃねえ!!」

アグリアは私の後ろから顔だけを出してウインガルへと怒鳴るが、
当の本人はどこ吹く風といった様子で受け流している。

「~~~~っ、シキ!! 行くぞ!!」

「お、おい!?!」

羞恥に耐えられなくなったのか、アグリアは私の手をとると、さ
つさと玉座の間を後にした。

ちらり、と振り返って見たガイアスとウインガルは、どちらも微
笑ましいものを見る様な目をしていた。

第8話 姉様（前書き）

ちょっと間が開いてしまい、申し訳ありません！

アグリアはクローゼットを開くと、中から出会った時に着ていた赤色の服と同じデザインの服を取り出した。

アグリアは取り出した服をベッドに放り投げると、現在着ているゴスロリ服を脱ごうとして、ピタリと動きを止めた。

どうしたのか、と首を傾げるシキへとアグリアは向き直る

「……おい、むこう向いてる」

「ん？ ああ、悪いな」

恥ずかしそうなアグリアから視線を外し、再びシキは部屋の中を見回した。

背後から聞こえる布が擦れる音を聞きながら、シキはただ無言で部屋を眺め続けていた。

「もういいぞ」

アグリアの声にシキが振り返ると、出会った時と同じ格好に戻ったアグリアがいた。

その手には先程まで着ていたゴスロリが握られている。

「これ、どうするんだよ……」

ひらひら、とゴスロリ服を目の前に持つてくるアグリアの頭に、シキは手を置いて撫でる。

「アグリアの為に買ったんだ。お前の好きにすればいい。気に入らないなら捨てても　　アグリア？」

「……………」

アグリアの性格からして、頭を撫でられたら問答無用で怒鳴られると思っていたシキは、アグリアが何も反応しないので、どうしたのかと顔を覗き込む。

アグリアの顔は嬉しさと恥ずかしさが半分ずつ混ざったかのような、つまりは照れた様な表情をしていた。

アグリアにとって、彼女に優しくしてくれる存在はとても少ない。ガイアスに拾われ、彼の傍に仕えるようになる頃には、すっかり今の言葉遣いが定着してしまい、誰も関わりを持つとうとはしなかった。

そして、アグリア自身もそれを望んでいた。

「私にはガイアスがいればいい」と、そう思っていた彼女だったが、やはりまだ彼女は15歳である。親の温かみというものを無意識に欲しているもおかしくはない。

ガイアスを父親とするなら、シキは母親だろうか？

そんな事を考えていたアグリアは、突然シキに頭を撫でられ、遠

い昔の記憶を思い出していた。

自分がまだお嬢様として暮らしていた、あの楽しかった日々。幼い自分を撫でてくれた母親の顔が目の前のシキと重なる。

背丈も、顔も、声も、口調だって違う。

それでも、アグリアは自分よりも少しばかり年上らしい目の前の少女に自らの母親の面影を見た。

それは偶然か、それともシキが内面ではかなりの世話好きであることが原因なのか　アグリアの中で、シキの存在はこの短期間の間にガイアスと同じくらいに大きな存在になっていた。

だからだろう。無意識に、言葉が出てしまったのは

「お母様」

ピシリ、と何かが固まる様な音が聴こえた気がした。

アグリアは頭を撫でていた手が止まった事で現実へと引き戻された。目の前には不意をつかれたかの様に驚愕に目を見開くシキがいる。

「……シキ？」

彼女の声で我に返ったのか、突然手を引つ込めて背中を向けるシキに彼女は首を傾げる。

無意識の言葉だったため、アグリアは先程の自分の言った言葉を覚えていなかった。

「シキ、どうしたんだ？……っていつか、何で私の頭を撫でた！？」

「……」

シキは背中を向けたまま右手を顔に当て、返事をしない。
アグリアは少しむっ、と顔をしかめると、シキの肩を掴んで強引に振り向かせる。

「おい、私の話を聞いて

」

そして言葉を無くした。

シキの顔は林檎と見間違っくらいに赤くなっていた。

「は……え……？」

「……う……み、見るな」

シキはアグリアの手を少し強引にに払うと、直ぐにまた背を向けてしまった。

アグリアは目の前にあった光景に呆然としたまま固まっていた。思い出すのは今見たシキの顔。

羞恥で赤く染まった頬、潤んだ瞳、慌てて後ろを向く時の少女らしい反応……。

原因が自分が言った言葉であるが、内容を覚えていないアグリアはシキの突然の乙女らしい行動に驚くと共に、シキの新たな一面を見た気がして少し嬉しくなった。

故に、多少なりとも悪戯心が生まれてしまうのも致し方ない事である。

「何だあ？どうかしたのか、シキ？」

「っ」

ニヤリと笑った顔のままシキの前に回り込んだアグリアは、シキを下から見上げる様に覗き込む。

僅かに息を呑むシキの行動に、元々サディスティックな一面を持

つアグリアは僅かに体を震わせる。

何かと自分をおちよくるシキを、今は自分が好きに弄っていると、そう思うだけで彼女はキュンと胸が締め付けられる様な感覚を覚える。

「う、うるさい……お前が急に変な事を言うからだ」

視線を逸らしながらそう言うシキに、一步近づぐ。

「へえ、私は何て言ったんだ？ ちょっとぼーっとして覚えてねえんだよ。教えてくれねえか？」

「……う」

アグリアの一步に合わせて後ずさるシキを、更に一步追い掛ける。

「オ、オレに向かって……お、お母様とか、言ったんだぞ……」

「……っ!?」

アグリアは一瞬、僅かにたじろぐが、直ぐに平常心を取り戻すと、若干だが熱い自らの頬を無視して更にシキに近づぐ。

「ふうん……シキは私からお母様って呼ばれて恥ずかしかったわけだ」

「な……ち、違っ」

シキが更に一步下がろうとした瞬間、背後にあるベッドに躓き、「うわっ!？」という言葉と共にそのまま背中から倒れ込む。

「アハハ、シキのこんな場面を見れるなんてなあ」

シキは顔を右手で隠すと、小さく呻いて俯せに体勢を変えてそのまま沈黙した。

どうやら拗ねてしまったらしい。

やりすぎたか、と心の中で軽く舌打ちしたアグリアは、そのままシキのすぐ隣に腰掛ける。

「アハハ、そう拗ねんなんて」

「拗ねてなんか、ない」

ぶっきらぼうに言い放つシキに、アグリアはけらけらと笑う。

「ああ、そつだよなあ、お母様じゃあねえな。どつちかつて言えば姉様って感じた」

そう言つて再び笑い出すアグリアを、シキは首だけを動かして睨みつける。

暫くそうしていたが、やがてシキが大きな溜め息をつき、背を向けてベッドに潜り込むと、「もう、好きにしろ」と、一言だけ告げて黙ってしまった。

アグリアは自分よりもおそらく年上だが、意外なところで子供っぽいシキの反応を堪能して満足したからか、小さく欠伸をするとシキの隣へと潜り込む。

「……おい」

「何だ、姉様？」

「っ!？」

アグリアの「姉様」発言に少しばかり反応したシキだったが、直ぐに言葉を返す。

「……何でオレの隣に潜り込むんだ？」

「だってよお、私の部屋にはベッドが一つしかねえんだから、こつするしかねえだろ？」

「……………」

黙ってしまったシキの背中を眺めつつ、眠気で徐々に暗くなる視界の中でアグリアは思わず頬が緩むのを感じるのであった。

「おやすみ、姉様」

アグリアの眩きを最後に、部屋の中は静寂に包まれた。

第9話 居場所（前書き）

アグリアの設定については若干ですが独自のアレンジを加えてあります。

第9話 居場所

-シキSide-

ふと、目が覚めた

いや、目が覚めたという表現は誤りだろう。なぜなら、私は一睡もしていないのだから。

精霊である私にとって睡眠は必要ない。だからこうして目を閉じ、隣に眠る少女が起きるのを待っている。

「……姉様、か」

目の前の少女 アグリアが眠る前に私をそう呼んだ。

何やらむず痒くて、思わず赤面したのを思い出す。まったく、私らしくもない……。

いや、そもそも……私らしいとはどういう意味だろう？

私の表面的な態度は『式』をモデルにしているだけの借り物だ。

だから今考えている『私らしさ』とは違っているのが当たり前なのだ。

本来の私は　もっと普通で、心配性で……。
少なくとも、式のようにぶっくらぼうでもなければ、殺人衝動に駆
られる様な事もない。

なら、あの時の私は素の自分だった？

何日も一緒に過ごしていたアルヴィンにさえ素の自分は見せた事
がないというのに……。

素の自分を引き出された事に驚愕しつつ、隣で眠るアグリアの顔
を覗き込む。

普段の鋭い目元とは違い、穏やかで年相応の寝顔で可愛らしい。
しかし、彼女が何故あそこまで歪んでしまっているのか、私には
わからない。

他人の過去を詮索するのは趣味ではないし、する気も起きない。

……だが、何故か放っておけない。またイル・ファンの時の様に
無茶をしないか心配になってくる。

……ああ、私は何故こんなにもアグリアを心配しているのだろうか？

同性だから？

子供だから？

私を、姉と呼んだから？

きっと、どれも違う。

何故、どうして、という考えが頭の中でぐるぐる回ると回り続ける。

私は無意識に掴んでいたベッドのシーツを放すと、アグリアを起さない様にそっと、部屋から出た。

あのまま彼女の顔を見ていたら、私は自分を見失いそうだったから。

早朝のカン・バルクはまだ薄暗く、明かりがついている家も疎らで、まだ街全体が寝ている様に感じられる。

そんな街の様子を、私は城のバルコニーの一つから見下ろしていた。

この場所は城下街をよく見渡せるし、朝日を見るのにも絶好の場所だろう。

ここで私は先程の考えの続きをしていた。

私がアグリアを放っておけない理由。

アグリアは一言で言えばお転婆で破天荒な少女といったところだろう。

交戦的で、ガイアス以外の人間には興味が無いといった感じだ。

まあ、私がどう思われているかはわからないが……。

彼女が何故ガイアスの下で戦闘員として働いているのかはわからない。

普通ならまだ家族と共に暮らし、学校に行っている年齢だ。

となると、自然に情報は絞られてくる。

「アグリアは何らかの事情によりガイアスに拾われた……そうだろうか？」

私は振り返りつつ、わざと少し大きめに声を出す。

すると、バルコニーの入口から一人の男が現れた。

昨日見たばかりだ。忘れる筈がない。

昨日と同じ、朱色の鎧を着た黒髪の男　ア・ジュール王、ガイアスは堂々と私の目の前に立った。

ガイアスは少しだけ私を見詰めた後、すぐに視線を逸らしてカン・バルクの街中を見渡した。

「……俺は、毎日早朝にここから街を見渡している。　何故かわかるか？」

私の質問に答ええないガイアスに少しだけ不機嫌になるが、彼の問いに「いや……」と、首を横に振って答える。

ガイアスはこちらを一瞥すると、再び街へと視線を向ける。

「このア・ジュールの王として、俺は国の全てを守りたいと考えている。」

しかし、俺にもできる事とできない事がある。一人でできる事など、たかがしれているだろう」

ガイアスは腰に挿した刀を抜くと、目の前に構える。

「ある時、たまたま城下街を眺めていた俺は、街の路地裏へと駆け込む一人の少女を見かけた。」

俺は少女の入った路地裏へと向かい、そこで倒れていた少女を助けた。……その少女とはある貴族の娘だった」

ガイアスは刀を下ろすと、私へと視線を向けた。

その瞳はどこまでも真っ直ぐで……何故か、それがとても羨ましかった。

「その少女の家は今が無い。とある理由で少女は家族を失い、一人でこのカン・バルクまで逃げてきたのだ。」

……俺は、その少女を引き取り、城に住ませた」

私は黙ってそれを聴き続ける。

「少女は家を失った後、様々な事に翻弄され続けていた。人身売買、詐欺、窃盗……。時に騙し、騙され、もはや誰も信じられなくなる

程にな。

最初は俺が誰であるかを知っていても敵意を剥き出しにしてきた。孤独が嫌いな筈なのに誰も頼れない。その姿はまるで小さなウサギの様だった」

ガイアスは私を視界に入れると、刀を鞘に納め、バルコニーの出口へと歩いていく。

出て行く寸前、彼は背中を向けたまま立ち止まる。

「あれ以来、俺はこうして街を見下ろす様になった。もし、またその少女の様な者がいたら助けられるようにな」

私はガイアスの背中を眩しいと感じた。

人の上に立つ者としての覚悟、決意の様なものを垣間見た気がして 眩しかった。

「俺にはお前はあの時の少女と同じに見える」

「……？」

ガイアスの言葉に首を傾げる。

昔の少女と同じとはどういう事だろうか。

「お前も、誰かを必要としているのではないか？ 俺は、お前が」

人で佇む時の姿がまるで寂しがるウサギの様に見える」

「……」

それだけ言うと、ガイアスは城の中へと消えていった。

残った私は胸元へと手を当てると、朝日が昇る山々へと視線を向ける。

「……寂しい、か」

私の言葉は白い息と共に空気に溶けていった。

その後、しばらく朝日を眺めてからアグリアの部屋に戻った。

彼女は私の到着と同時に起きて、今はまだ眠いのかベッドに腰掛けた私に寄り掛かっている。

……私もずいぶんと懐かれたものだ。こうして甘える様子を見てみると、確かにウサギに見えなくもない。

私とアグリアが互いに惹かれたのは同じ様な“質”を持っているからだろう。

“質”とは、簡単に言えば親近感や共通意識の様なものだ。……

心、 いや、魂の性質と言ってもいいかもしれない。

私とアグリアは他人との触れ合いを求めているのに、それを上手く受け入れられない、もしくは過去の出来事による心的外傷トラウマによって他人と触れ合えない状態にある。

アグリアは幼い頃の心的外傷トラウマが原因。

私は きつと、まだ『シキ』としての自分を受け入れきれないからだろう。

「……あ、シキ？」

眠そうに目を擦りながらアグリアが私を呼んだ。
私の姿を視界に入れた彼女はふらふらと立ち上がる。

「 つ、痛!？」

「……アグリア!？」

顔を洗おうと洗面台へと向かうアグリアが突然、がくりと体勢を崩した。

昨日、足を怪我した事を忘れていたのだろう。私が慌てて体を支える頃には痛みで眠気が吹き飛んだらしく、顔をしかめて足を押さえていた。

「ああ、クソツー！ 足怪我したの忘れてた！！ 痛ってエ……」

本来の調子に戻ったアグリアの肩を支えつつ、洗面台まで移動すると顔を洗う。

その後、アグリアを椅子に座らせて足に軽く触れて調子を確認してみる。

「……どうだ？」

「ああ、昨日よりはマシになってるな。でも、まだまだ完治までには時間がかかりそうだ」

「そうか……」

私は足に巻いていた固定用の包帯を取り替えると、顔を上げる。

「仕事もあるだろうし、回復術を使える人を呼んだ方がいいな」

「ああ、そうだな……チツ、あのババアが居れば早いんだけどな」

「……？」

首を傾げる私を見て「ああ、そうか……」と、納得した様にアグリアは苦笑いする。

「そっか、シキはしらねえんだよな。私を含めた陛下の直属の部下の一人に精霊術が得意なプレザっていう女がいるんだよ。今は任務中で城には居ねえけどな」

アグリアはそう言うと再び顔をしかめて「でもあいつに貸しを作るのはなあ……」とぶつぶつ呟き始める。

そんな中、私はさりげなく気になった事を尋ねる。

「なあ、ガイアス直属の部下ってというのは他の兵士とは違うのか？」

「……あん？ ああ、そうだな。せっかくだから説明してやんよ」

アグリアは自分の仕込み杖を取り出すと、机の上に置く。

「まず陛下直属の部下についてだけど、人数は四人で、四象刃^{フォーザ}っていうんだ。四象刃^{フォーザ}っていうのはア・ジュールの伝説の聖獣の名前で、こいつが持ってた四つの武器をイメージしてるらしいぜ。」

私はそのうちの『針』を意味する称号を持ってんだ。他の奴らからは『無影のアグリア』なんて呼ばれてる」

そう言って仕込み杖をこんこんと叩きながら、彼女はニヤリと笑った。

確かに、この杖の形状は針にみえなくもない。

「他の三人だけど、シキは既に一人には会ってるぜ。陛下の隣にいたあの黒い奴だよ」

「ああ……たしか、ウインガル……だっけ？」

「ああ、そうだ。あいつは『革命のウインガル』って呼ばれてる。『翼』を意味する称号を持っていて、『ア・ジュールの黒き片翼』なんて呼ばれる時もあるな。一応、四象刃フォーヴのリーダー的な扱いだ」

相槌をうつつ私を見ながら、アグリアはどこか嬉しそうに説明を続ける。

「三人目はさっき言ったプレザって女だ。『牙』の称号を持っていて、二つ名は『百術のプレザ』だったかな？」

「……まあいいか、精霊術がやたらと得意なんだけどよ……いつも私を子供扱いしやがるから苛々するんだ」

そのプレザとのやり取りを思い出したのか少々不機嫌そうに顔をしかめるが、そのまま続きを話し始める。

「最後の一人はジャオっていうでかいオッサンだ。『角』の称号を持ってて、二つ名は『不動のジャオ』だな。

よく私に菓子を差し入れしてくるんだ。まったく、ガキ扱いしやがって……美味いけどさ」

コロコロと表情を変えるアグリアに、思わず私まで微笑んでしま
う。

辛い過去があったらしいが、今はなかなか幸せそうだ。

「後は……って、おいシキ。私の話ちゃんと聞いてんのか？」

「ああ、聞いてるよ」

彼女の様子から今の生活も悪くない様なので安心した。

なら、私はそろそろ行かなければならない。アルヴィンも探さな
くちゃいけないしね。

「……シキ？」

「……ん？ どうしたアグリア、そんな寂しそうな顔して」

「……別にそんなんじゃないよ」

アグリアはぶっきらぼうにそう言いながら顔を逸らす。

私がいなくなる事を感じ取ったのだろうか。だとしたら凄く勘の
鋭い子だ。

「……アグリア」

「……なんだよ」

「オレは今からここを出る」

「……っ」

アグリアはビクリと肩を震わせて私を見上げる。

ああ、そんな顔をしないでほしい。出発し辛くなる。

「なあ、シキ……お前、陛下に仕える気はねえか!？」

「……アグリア？」

アグリアは私の着物の袖を掴んで必死な顔でそう言った。

「……私にもよくわかんねえけど、シキは……シキは私と似てんだよ。何だか昔の自分と似てる部分があるんだ。だから」

「アグリア」

私はアグリアの頭に手を乗せる。そしてゆっくりと撫でた。優しく、諭すように。

「ありがとう、アグリア。私を心配してくれてるんでしょ？」

「……シ、キ」

「私にはやることがあるの。大丈夫、確かに私は一人ぼっちだったけれど、アグリアは私を姉様って呼んでくれた。だから、大丈夫……」

「……姉、様」

頭から手を離すと、椅子にかけてあった赤いジャンパーを羽織り、再びアグリアに向き直る。

「さあ、アグリア。昨日使ったワイバーンを貸してくれないか？」

少しだけ素の自分を見せた後だからちよつと恥ずかしいけど、私はしっかりとアグリアを見つめた。

「わかったよ……姉様。ただし、また来てくれよ？ 絶対だからな！？」

アグリアは泣きそうだったけれど、しっかりと頷いてくれた。

その数分後、私はワイバーンに跨がり、朝日が眩しい空へと舞い上がった。

目指す目的地はマクスウェルの目撃情報があったハ・ミルという村だ。

私はワイバーンに繋がる手綱を握る手に力を込めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913x/>

テイルズオブエクシリア～死神伝記～

2011年12月8日03時08分発行